

化粧行動を規定する化粧基準の構造解明

国際日本文化研究センター
京都大学ベンチャービジネスラボラトリー 平松 隆円

Abstract

Main purpose of this study was to solve the structure of makeup standards. Major findings obtained were as follows :

1. It was made clear that structure of makeup standards consisted of “personality”, “social harmony”, and “sympathize with other” which were a standard of the self-revelation and a standard of the social assimilation.
2. For male, makeup standers were specified by private self-consciousness and internal other-consciousness. By contrast, for female, makeup standers were specified by public self-consciousness, private-self-consciousness, internal-other-consciousness, external-other-consciousness, and imaginal-other-consciousness.

Key words : *makeup behavior, makeup standards, self-consciousness, other-consciousness, difference between male and female*

要 旨

本研究の主要な目的は、生活場面で行われる化粧行動において何が基準として重視されるについて明らかにすることである。えられた結果を要約すると、次の通りである。

- 1 化粧基準は、『個性』『社会的調和』『他者同調』という自己顕示的な基準と社会同化的な基準が明らかとなった。
- 2 男性の化粧基準には、『個性』『社会的調和』

『他者同調』に共通して、私的自意識、外的他者意識が規定し、女性の化粧基準には、部分的ではあるが公的自意識、私的自意識、内的他者意識、外的他者意識、空想的他者意識が規定することが明らかとなった。

キーワード：化粧行動、化粧基準、自意識、他者意識、男女差

I はじめに

人は生きるなかで、集団の成員としてふさわしい生活様式、行動、価値などを身につける。それは化粧も同様であり、それゆえに、人は状況に応じて一定の方法で化粧を行う。そこには、「化粧基準」ともいうべき行動のよりどころがあり、それに照らし合わせて実際の行動を決定している。

化粧と関連する衣服については、例えば Kwon (1987) や Kwon (1988) や福岡・高木・神山・牛田・阿部 (1998) などが、生活場面と着装基準の関連性について検討している。ここでは、人々が衣服を選択するときに考慮する基準(着装基準)として、『個性・流行』『実用性』『社会的調和』の3因子が明らかにされている。そして、衣服が生活面で果たす機能により、『フォーマル』『セミフォーマル』『インフォーマル』の3つの場面にふさわしいと思われる基準に従って、衣服を選択して着装していることが明らかとなっている。

したがって、化粧についても、何らかの基準が存在し、様々な場面での化粧行動を規定していると仮説できる。しかしながら、これまで化粧については、その行動のよりどころとなる基準や規範といったものについて、検討がされてこなかった。

少ないながらも、平松・牛田 (2008) は化粧規範に関する研究として「化粧を施す生活場面とそれを規定する化粧意識と個人差要因」について検討している。それによると、対人接触や状況の公私の高さにより化粧を施す生活場面が構造化され、男性では必需品・身だしなみが、女性では魅力向上・気分高揚、必需品・身だしなみ、効果不安が化粧を施す生活場면을規定していることが明らかとなっている。

しかしながら、個人のもつ化粧意識から社会的な化粧規範にアプローチしてはいるものの、基準という部分については十分に検討されてい

ない。そのため、先行研究から化粧基準について検討し、仮説を実証することは難しい。そこで本研究では、化粧基準の構造について明らかにすることを試みたい。

また、これまでの平松・牛田 (2003) や平松・牛田 (2004) による化粧に関する研究から、自意識や他者意識といった個人差要因が、化粧行動や化粧意識を規定していることが明らかとなっている。そのため、化粧基準についても個人差要因との何らかの関連が認められると仮説できる。したがって、本研究においても、化粧行動や化粧意識に関する研究で関連性が検討された自意識や他者意識といった個人差要因との関連性についても検討したい。

II 研究の概要

i 調査方法と調査時期、および調査対象者

2008年5月に関西の大学生を対象として、集合法で質問紙調査を実施した。

倫理的配慮として、調査票に研究の目的を明記し、回答は任意であり、無記名で個人が特定されることがないことを事前に口頭で説明した。

調査対象者は、男性329人 ($M = 18.80$ 歳, $SD = 1.16$)、女性299人 ($M = 18.99$ 歳, $SD = 1.58$) の合計628人 ($M = 18.73$ 歳, $SD = 1.21$) であった。

ii 調査内容

1) 化粧基準

Kwon (1987) や Kwon (1988) や福岡・高木・神山・牛田・阿部 (1998) の研究における着装基準を参考に、20の化粧基準項目を選定した。

それぞれについて、自分自身にどの程度あてはまるかを「あてはまらない(1)」から「あてはまる(5)」までの5件法で回答を求めた。

なお、化粧がどのような行動を指すかについては、平松 (2009) が詳細にまとめている。だ

が、本研究では化粧の定義を、厚生労働省(2006)が定めた薬事法における「人の身体を清潔にし、美化し、魅力を増し、容貌を変え、又は皮膚若しくは毛髪を健やかに保つために、身体に塗擦、散布その他これらに類似する方法で使用されることが目的とされているもので、人体に対する作用が緩和なもの」にしたがった。そして、装飾(ファンデーション、アイシャドウ、ヘアスタイリングなど)、肌の手入れ(化粧水、乳液など)、香り(フレグランス、デオドラントなど)を化粧として扱い、その具体的な行動の内容を調査対象者に口頭で説明した。

2) 自意識

自意識とは、自分自身への注意の向けやすさに関する性格特性である。自分の外見や他者に対する行動など外から見える自己の側面に対する注意を向ける程度の「公的自意識」、自分の内面や気分など外からみえない自分の側面に注意を向ける程度の「私的自意識」からなる。

本研究では、菅原(1984)の自意識尺度の21項目を用いて「あてはまらない(1)」から「あてはまる(5)」までの5件法で得点化を行った。

確認のため因子分析(主因子法・Varimax回転)を行い、既存尺度と同じ2因子を得た。内的整合性および因子構造の点から不適切な「自分を反省してることが多い」「世間体など気にならない」「自分自身の内面のことには、あまり関心がない」をのぞく18項目で簡便因子得点を算出した(公的自意識： $\alpha = 0.86$ 、私的自意識： $\alpha = 0.84$)。

3) 他者意識

他者意識とは他者への注意、関心、意識が向けられた状態をいい、他者への注意の向けやすさに関する性格特性である。他者の気持ちや感情などの内面情報を敏感にキャッチし理解しようとする意識や関心の程度である「内的他者意

識」、他者の化粧、服装、体形、スタイルなどの外面に現れた特徴への注意や関心の程度である「外的他者意識」、他者について考え・空想をめぐらせその空想的イメージに注意を焦点付け、それを追いかける傾向の程度である「空想的他者意識」からなる。

本研究では、辻(1993)の他者意識尺度の15項目を用いて「あてはまらない(1)」から「あてはまる(5)」までの5件法で得点化を行った。

確認のため因子分析(主因子法・Varimax回転)を行い、既存尺度と同じ3因子を得た。内的整合性および因子構造の点から不適切な「人の言動には絶えず注意を払っている」「人のことをあれこれと考えていることが多い」をのぞく13項目で簡便因子得点を算出した(内的他者意識： $\alpha = 0.86$ 、外的他者意識： $\alpha = 0.78$ 、空想的他者意識： $\alpha = 0.82$)。

4) フェイス項目

年齢と性別を回答させた。

5) 統計処理

分析には、PASW Statistics 17.0を用いた。二者間の差の検定を行う場合、事前の手段として、Levene検定により等分散性を確認した。不等分散であった項目についてはAspin-Welchのt検定を行い、その他の項目についてはStudentのt検定を行った。

III 結果

1) 化粧基準の評定平均値と男女差

化粧基準の各項目の評定平均値をみてみたい(TABLE 1)。

男性は、ほとんどの項目について、どちらともいえないと回答している。相対的に、「自分の好みに合っている」「簡単にできる」「自分の魅力がアップできる」などを基準にしていると答

TABLE1 化粧基準の評定平均値と男女差

	男 性		女 性		t値	
	M	SD	M	SD		
自分の品位を傷つけない	3.04	1.25	3.42	1.00	-4.01	***
流行に合っている	2.75	1.16	3.23	1.03	-5.19	***
お金がかからず経済的	3.16	1.27	3.44	1.12	-2.79	**
自分の魅力がアップできる	3.22	1.20	3.89	0.82	-7.75	***
場所柄や雰囲気合っている	3.05	1.19	3.74	0.90	-7.86	***
目新しく、人目をひく	2.74	1.13	3.00	1.06	-2.83	**
自分の好みにあっている	3.38	1.29	3.99	0.91	-6.53	***
自分を引き立てる	3.21	1.19	3.82	0.85	-7.05	***
内面を引き出す	2.83	1.05	3.25	0.93	-4.98	***
簡単にできる	3.26	1.25	3.85	0.92	-6.47	***
自分らしさが表現できる	3.06	1.16	3.61	0.96	-6.19	***
伝統やしきたりに合っている	2.47	1.10	2.55	0.99	-0.89	
つけ心地がよい	2.96	1.23	3.48	1.05	-5.39	***
周囲の人に失礼にならない	3.13	1.18	3.63	0.97	-5.55	***
周囲の人と同じ化粧である	2.44	1.04	2.82	1.01	-4.40	***
時節(季節)にあっている	2.87	1.14	3.30	1.03	-4.72	***
自分の性や年齢にあっている	3.11	1.24	3.73	0.96	-6.66	***
自分の社会的地位・立場にふさわしい	2.93	1.15	3.58	0.95	-7.21	***
周囲の人から信用を損なわない	3.02	1.20	3.54	0.99	-5.68	***
若々しく見える	2.94	1.18	3.28	1.08	-3.57	***

*** $p < .001$, ** $p < .01$

え、「周囲の人と同じ化粧である」「伝統やしきたりにあっている」などを基準にしていないと回答している。

女性は、ほとんどの項目について、ややあてはまると回答している。相対的に、「自分の好みに合っている」「自分の魅力がアップできる」などを基準にしていると回答し、「周囲の人と同じ化粧である」「伝統やしきたりにあっている」などを基準にしていないと回答している。

化粧基準の男女差を検討したところ、「伝統やしきたりにあっている」では有意な男女差が認められなかったものの、その他の項目では男性が女性よりも、あてはまらないと答えていた。

2) 化粧基準の構造

化粧基準の構造を明らかにするため、各項目の評定点をもとに主成分分析 (Varimax 回転)

を行った (TABLE 2)。

その結果、Kaiser-Guttmanによる最低固有値1.0を基準に「自分を引き立てる」「自分の好みにあっている」などからなる『個性』($\alpha = .92$)、「周囲の人から信用を損なわない」「自分の社会的地位・立場にふさわしい」などからなる『社会調和』($\alpha = .93$)、「周囲の人と同じ化粧である」「伝統やしきたりにあっている」などからなる『他者同調』($\alpha = .83$)と命名した3因子が抽出された。

この3因子で簡便因子得点を算出し、以後の分析データとした。

次に、明らかとなった各因子の男女差をt検定で検討した (TABLE 3)。

その結果、すべての項目で有意な男女差が認められ、男性は女性に比べ「どちらともいえない」と考えていた。

TABLE2 化粧基準の構造 (主成分分析・Varimax回転)

	個性	社会的調和	他者同調
自分を引き立てる	0.81	0.41	0.16
自分の好みにあっている	0.77	0.49	0.05
自分らしさが表現できる	0.76	0.29	0.28
自分の魅力がアップできる	0.75	0.43	0.19
内面を引き出す	0.64	0.21	0.48
自分の品位を傷つけない	0.56	0.47	0.19
つけ心地がよい	0.52	0.39	0.38
周囲の人から信用を損なわない	0.26	0.79	0.36
自分の社会的地位・立場にふさわしい	0.24	0.79	0.38
周囲の人に失礼にならない	0.36	0.77	0.21
自分の性や年齢にあっている	0.36	0.75	0.32
簡単にできる	0.52	0.62	0.00
場所柄や雰囲気に合っている	0.56	0.57	0.30
お金がかからず経済的	0.46	0.54	0.15
時節(季節)にあっている	0.31	0.52	0.49
周囲の人と同じ化粧である	0.05	0.25	0.80
伝統やしきたりに合っている	0.06	0.16	0.75
若々しく見える	0.35	0.37	0.62
目新しく、人目をひく	0.56	0.06	0.62
流行に合っている	0.51	0.20	0.55
固有値	11.35	1.59	1.06
累積寄与率	56.72	64.68	69.97
α	0.92	0.93	0.83

TABLE3 化粧基準因子の男女差

	男性		女性		t値	
	M	SD	M	SD		
個性	3.09	1.03	3.64	0.67	-7.45	***
社会的調和	3.06	1.03	3.61	0.70	-7.41	***
他者同調	2.67	0.92	2.98	0.73	-4.37	***

*** $p < .001$

TABLE4 化粧基準を規定する個人差要因

	男性			女性		
	個性	社会的調和	他者同調	個性	社会的調和	他者同調
公的自意識	0.17 *			0.16 *	0.25 ***	
私的自意識	0.15 *	0.22 ***	0.14 *	0.21 **		
内的他者意識				0.18 **	0.25 ***	
外的他者意識	0.14 *	0.19 ***	0.23 ***	0.26 ***		0.35 ***
空想的他者意識				-0.31 ***	-0.22 **	
R ²	0.14 ***	0.11 ***	0.09 ***	0.22 ***	0.12 ***	0.12 ***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

3) 化粧基準を規定する個人差要因

化粧基準を規定する個人差要因を明らかにするため、化粧基準を目的変数とし、自意識や他者意識の各因子を説明変数とする重回帰分析をStepwiseによる変数選択法で行った (TABLE 4)。

男性では、『個性』を規定する個人差要因として、公的自意識、私的自意識、外的他者意識が正に有意に選択された。『社会的調和』を規定する個人差要因として、私的自意識、外的他者意識が正に有意に選択された。『他者同調』を規定する個人差要因として、私的自意識、外的他者意識が正に有意に選択された。

女性では、『個性』を規定する個人差要因として、公的自意識、私的自意識、内的他者意識、外的他者意識が正に、空想的他者意識が負に有意に選択された。『社会的調和』を規定する個人差要因として、公的自意識、内的他者意識が正に、空想的他者意識が負に有意に選択された。『他者同調』を規定する個人差要因として、外的他者意識が正に有意に選択された。

IV 考察

1) 化粧基準の構造と男女差

化粧基準について、程度に差はあるものの、相対的に男女共通して「自分の好みに合っている」「自分の魅力がアップできる」などを基準とし、「伝統やしきたりにあっている」「周囲の人と同じ化粧である」を基準としていないことが明らかとなった。

永尾 (1983) は、化粧をする理由として首都圏在住の15歳以上の女性1248名を対象に調査を行い、10歳代の女性では「美しくみせたい」「創作するのが楽しい」が特徴であるのに対し、年齢の上昇とともに「気分が引き締まる」「社会的エチケット」が特長として現れてくることを指摘している。これは、若年齢層ほど化粧を楽し

みとして、また装飾的行動として捉えていることを意味している。本研究の知見は、永尾の指摘を裏づけるものとなった。

主成分分析により構造化を試みたところ、『個性』という自己顕示的な基準と、『社会的調和』『他者同調』という社会同化的な基準が明らかとなった。

着基準には、「自分を引き立てることができる」などの『個性・流行性』、「洗濯や手入れが簡単である」などの『実用性』、「場所柄や雰囲気合っている」などの『社会的調和』の3因子が明らかにされている。

着基準における『個性・流行性』は、本研究で明らかとなった化粧基準の『個性』と対応するものであると考えられる。着基準における『社会的調和』については、「自分の社会的地位にふさわしい」といった社会における自己の位置づけに基準がおかれるのか、もしくは「周囲の人と同じ化粧である」といった他者に基準がおかれるのかといった基準の対象の違いにより、『社会的調和』と『他者同調』に化粧基準では構造が分かれたものの、それぞれに対応すると推測される。

2) 化粧基準を規定する個人差要因

男性の化粧基準には、『個性』『社会的調和』『他者同調』に共通して、私的自意識、外的他者意識が規定することが明らかとなった。

すなわち、自分の内面や気分など外からみえない自分の側面に注意を向ける程度の高さや、他者の化粧、服装、体形、スタイルなどの外面に現れた特徴への注意や関心の程度の高さが男性の化粧基準のそれぞれを高めている。

女性の化粧基準には、部分的ではあるが公的自意識、私的自意識、内的他者意識、外的他者意識、空想的他者意識が規定することが明らかとなった。

すなわち、自分の外見や他者に対する行動な

ど外から見える自己の側面に対する注意を向ける程度の高さ、自分の内面や気分など外からみえない自分の側面に注意を向ける程度の高さ、他者の気持ちや感情などの内面情報を敏感にキャッチし理解しようとする意識や関心の程度の高さ、他者の化粧、服装、体形、スタイルなどの外面に現れた特徴への注意や関心の程度の高さ、他者について考え・空想をめぐらせその空想的イメージに注意を焦点付け、それを追いかける傾向の程度の低さが女性の化粧基準のそれぞれを高めている。

様々な場面や状況において化粧を行うときによりどころとなる化粧基準は、『個性』という自己顕示的な基準も存在するものの、『社会的調和』や『他者同調』など周囲の人々の化粧行動から自己のそれを調整する社会同化的な因子によっても構造化されている。したがって、化粧行動を調整するために、他者の外見に対する注意の向けやすさである外的他者意識が化粧基準を規定していると推測される。

化粧という行動を考えた場合、それは外見に関する行動である。一般的には自分の外見や他者に対する行動など外から見える自己の側面に対する注意を向ける程度の高さが規定すると仮説でき、本研究においても部分的ではあるが結果は裏付けされた。

しかしながら、本研究では自分の内面や気分など外からみえない自分の側面に注意を向ける程度の高さである私的自意識が規定していた。

化粧基準とは、人々が化粧の程度や内容を選択するときに考慮する基準であり、個人のなかに内在化している。その意味において、内在化した化粧基準を意識することが私的自意識と関連し、私的自意識が化粧基準を規定していると推測される。

また、空想的他者意識の低さが化粧基準を規定していた。すなわち、化粧基準が現前する他者を基準のよりどころとし、現前しないイメー

ジとしての他者は化粧基準に関連していない。このことは、所属する社会や集団に具体的な基準が存在し、つねに周囲の他者の外見情報を取り入れながら、自らの化粧を調整していることを意味している。

V ま と め

本研究の目的は、化粧行動を規定する化粧基準の構造について検討することであった。結果を要約すると次の通りとなる。

1. 化粧基準は、『個性』『社会的調和』『他者同調』という自己顕示的な基準と社会同化的な基準が明らかとなった。
2. 男性の化粧基準には、『個性』『社会的調和』『他者同調』に共通して、私的自意識、外的他者意識が規定し、女性の化粧基準には、部分的ではあるが公的自意識、私的自意識、内的他者意識、外的他者意識、空想的他者意識が規定することが明らかとなった。

今後の課題として、実際の化粧行動を化粧基準がどのように規定しているのかについて検討しなければならない。またそれだけではなく、世代間の比較検討が必要である。

すなわち、永尾が、年齢の変化とともに化粧をする理由に変化がみられることを指摘しているが、その変化が化粧基準においてもみられる可能性がある。その点において、化粧基準について世代間の変化を検討することは無視できない。

【参考文献】

- 福岡欣治・高木修・神山進・牛田聡子・阿部久美子 1998 着装規範に関する研究(第1報)－生活場面と着装基準の関連性－, 繊維製品消費科学: 39 (11), 42-48
- 平松隆円・牛田聡子 2003 化粧に関する研究(第2報)－大学生の化粧関心・化粧行動・異性への化粧期待と個人差要因－, 繊維製品消費科学: 44 (11), 69-75
- 平松隆円・牛田聡子 2004 化粧に関する研究(第4報)－大学生の化粧意識とそれを規定する個人差要因－, 繊維製品消費科学: 45 (11), 63-70
- 平松隆円・牛田聡子 2008 化粧規範に関する研究－化粧を施す生活場面とそれを規定する化粧意識と個人差要因－, 繊維製品消費科学: 48 (12), 59-68
- 平松隆円 2009 『化粧にみる日本文化－だれのためによそおうのか』水曜社
- 厚生労働省 2006 『薬事法』改正平成18年6月21日法律84号
- 永尾松夫 1983 女性における化粧意識, 化粧文化: 8, 133-144
- 菅原健介 1984 自己意識尺度日本語版作成の試み, 心理学研究: 55, 184-188
- 辻平治郎 1993 『自己意識と他者意識』北大路書房
- Yoon-Hee Kwon 1987 Daily Clothing Selection: Interrelationships Among Motivating Factors, *Clothing and Textiles Research Journal*: 5 (2), 21-27
- Yoon-Hee Kwon 1988 Effects of Situational and Individual Influences on the Selection of Daily Clothing, *Clothing and Textiles Research Journal*: 6 (4), 6-12